



Title	フランス語教育の今日/文学と語学教育：第32回BELC 夏期スタージュに参加して
Author(s)	高階, 早苗
Citation	études françaises. 2000, 33, p. 121-134
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/93727
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

フランス語教育の今日／文学と語学教育

——第32回 BELC 夏期スタージュに参加して——

高 階 早 苗

序

日本の大学におけるフランス語教育を初めて意識した学生時代、教育実習に相当するものがないことに、訝しい思いをしたことが思い出される。学問のなんたるかをわずかながら理解した後でも、語学教育に限っていえば、教育者相互の情報交換や模擬授業の試みなどもう少しあっても良いのではないかという気持ちは残っていた。とはいえ、あまりに手取り足取り学生の興味をもたせるような授業の傾向にも抵抗があり、教育に関する幾つかの集まりに出席することも少なくなっていた。その原因の一端には、文学研究と語学教育を同時に進めることは困難であるという固定観念もあったかと思う。日本における志賀高原スタージュの存在は知っていたが、参加の直前まで、若い非常勤講師を対象とした、第二外国語としてのフランス語の教育法として非常に狭く認識していた。今回この文章を書くことに思い至ったのは、私と同じような認識でいる人々に、スタージュがいかに多様であるかを知ってもらいたいと考えたからである。つまり、非常に熱心に語学教育を志す教育者とは少し異なる教官にも、又、反対に文学など不必要と思っている教官にも、スタージュのことを考えてもらいたいと思うからである。

1. CIEP-Belc 夏期スタージュの概要

それではまず副題にある CIEP-BELC（国際教育研究センター言語文明教育事務局）の夏期スタージュが、どのような目的でどのように運営されているかを簡単に説明していこう。この研修を運営している CIEP（国際教育研究センター）は、世界中のフランス語教育を支援する政府機関であり、外国語としてのフランス語の教員養成や教育資格（DELF, DALF）の認定、意見交換会の開催や資料の保管、提供などを行っている。その活動のひとつである夏期スタージュは、フランス国内の大学（1999年夏はノルマンディー地方のカーン大学）、出版社、テレビ局、ラジオ局などの協力を得て、毎年4週間に渡って開催されてきた。

まず開会式に出席して驚かされるのは、参加者の国籍が多岐に渡っていることである。その数は80ヶ国、350人に及ぶ¹。ヨーロッパ、アジア、南北アメリカ…とりわけアフリカからの参加者が非常に多いことに、「フランス語圏」というものの存在を実感させられた。しかも実際に授業に入り参加者との交流が深まると、アフリカと一言でいっても、アルジェリア、チュニジア、ナイジェリアなど、国によって教育政策や日常生活におけるフランス語の扱いがかなり異なっていることが分かるようになった。

又、参加前は全く予期していなかったことだが、参加者のうち最も人数が多かったのはフランス人であり、その数49名は他の国々に比べ圧倒的であった²。フランス政府や自国の援助を受けて参加している外国人に比べ、彼らのほとんどは自費で参加しており職種も極めて多様である。フランス以外の国でフランス語を教える教師、フランス国内で外国人むけにフランス語を教える教師、翻訳家や高等学校のフランス語教師、資格を取るために参加した者もあった。又、フランス以外の国で教える場合でも、その国でフランス語が公用語として指定されているか否か、教えている教育機関がフランス人の子弟を対象にしているのか否か、現地の子弟を対象とする

場合でも、フランス語を共通語としてあらゆる教科を教えているのか、又は単に外国語の選択科目として設定されているだけかでは、状況が全く異なっている。実際に授業に入った時、参加者はまずこういった自分の状況を説明しあう。そしてグループ研究では、新しい教材や講師の提案をどのように自分の学生達に適応させていくか考えていくことになるのである。こうした他の国々の状況を身近に感じることによって初めて、国際語としてフランス語を統制していくフランス政府の困難と努力を実感することができたように思われる。ここで言わんとしているのは、ひとつ間違えば支配被支配の構造を生み出しかねない言語政策の恐ろしさではない。英語圏の参加者が極端に少なく（アメリカ人3名、イギリス人0名）ヨーロッパでも北欧や東欧、そして数多くのアフリカ、南米の参加者が存在したことは、むしろ「生活の場に密着した外国語」という世界に目を向けるきっかけとなったように思う。言語を取り巻く状況は、日本のようにほぼ単一言語とあっていい環境にあると頭の中でしか理解できないが、生活に根ざしているが故に極めて複雑なものなのである。そうした認識なしに、英語偏重の教育を単純に受け入れようとしている現在の大学教育の傾向には憂慮せざるをえない。

2. スタージュ参加の目的

さて、ここからは実際に履修した授業内容の説明に入るわけだが、その前にスタージュに参加した個人的な目的を説明しておきたい。まず背景となる、現在私が担当している授業について述べよう。それらは次の3種類に分けられる。

- 1) フランス語専攻の1～2年生を対象とした文法、講読
- 2) フランス語専攻の学生を対象とした文学の講義、演習
- 3) フランス語以外を専攻とする学生を対象とした初級フランス語

今回スタージュに参加するにあたって改善したいと考えていた一番大きな悩みの種は、1) の文法の授業内容であった。なぜなら受講者は専門の学生だけにこちらの要求に従って学習はするものの、「楽しさ」からは一番遠いところにある授業だったからである。会話や LL の授業は別に設定されているため、文法はどうしても単調になってしまう。勿論、新しい言語体系を学ぶ喜びはあるであろうし、語学能力の向上が一番目に見えるかたちで現れる為、学生としても達成感を感じられるに違いない。しかし授業自体はどうしても詰め込み式にならざるをえない。それまで文法の授業というものはつまらないものだという諦めもあり、効率的に学ぶことに主眼を置いてきた。しかしながら、もっと創造的な授業、あるいは学問的に興味深い授業になりうるのではないかとその頃思い始めていたのである。授業の性質上難しいとはいえ、この授業の改善策の模索は、スタージュ参加の大きな目的であった。

次に 2) であるが、これについて言えば、こうした専門的学問の授業をスタージュで改善などと考える方が間違っているとも言える。しかしそれをここに挙げた理由は、私の担当する授業を履修する学生が必ずしも文学に興味を持っているわけではないという事情があるためである。むしろ、文学以外——例えばフランス史やフランス社会学を専門とする学生の方が数としては勝っている。フランス語科の学生は総合的にフランスを理解する必要があるので、文学に興味がなくとも是非とも最低限のことは知っててもらいたいのであるが、どのようにして、文学的背景がゼロの学生を積極的に授業に参加させるかは、頭の痛い問題であった。

最後に 3) に関しては、フランス語教育を考える集会などで参考になる意見を聞くことも可能であり、テキストも非常に工夫されたものが数多く出版されつつある。又、少人数のクラスを担当していることもあって、CD やビデオ、ゲームを取り入れるなど自分なりの工夫を現在も行ってお

り、その反応にもある程度満足を得ている。勿論ステージにおいて、更に様々な可能性を知ることができるのではないかという期待はあったが、以上のような理由から、今回はむしろ主眼を2) 3) において研修プログラムを組むことにした。

3. 授業内容

全日程25日間（7月5日～29日）のうち、休日やガイダンスを除くと実際に授業が行われたのは16日間であり、プログラムは基本的に前期、後期に分けられていた。二期を通して受講する必修科目は「フランス語とその使用」「文化的アプローチ」「言語と文法」「言語の科学」「外国語教授法」「教材、技術、補助教材」「オーラルの授業を活気づかせる技術」「テキストと読解」「言語習得のための教材とマルチメディア」「人間関係と教育学」の10課目から1つを選択することになる。それ以外に前期35科目、後期42科目の選択授業が設定されており、ひとコマ2時間、朝8時15分から夜10時30分までの時間帯で自由に選択できるようになっている。

前期、後期とも授業の始まる前日にガイダンスが行われ、受講希望者は渡仏前に送られてきた授業案内を参考に、前もってリストアップした授業の案内を聞きに行く。実際に授業の行われる時間帯ごとに区切ってガイダンスは行われるが、各科目とも、1時間半のうちに同じ説明が3回繰り返されるので、参加者は同じ時間帯の授業の説明を3つまで聞くことができる。そこで、活字では分からなかった講師の印象や授業を進める態度、クラスの雰囲気などを吟味して、自分にあった科目を選ぶことができる。その日のうちに参加者は登録を完了し、人数が多いクラスについては夕方開かれる集会で抽籤などが行われ調整される。今回、受講希望者が集中したのはパソコンを使って教材を作る授業、ゲームを取り入れた授業などである。後者の授業のひとつはあまりに希望者が多かった為、別の時間帯に1コマ余分に授業が設定された。抽籤にしても機械的に行われるのではな

く、集会の間、講師が事情を説明し、別の授業あるいは時間帯に移れる人は移るよう説得するなど、希望者の意志を尊重した柔軟な対応が取られていた。

授業内容についてもう少し説明すると、文法、教材研究、現代フランス事情、発音、シュミュレーションを用いた授業、テレビやラジオを用いた授業の進め方、文学、演劇、シャンソン、ビデオ製作など従来のものに加え、特に今回目立ったのはパソコンを用いた授業である。休憩時間にも教室を解放しパソコンを使えるようにするなど、パソコンの普及率の低い国々からの参加者にも好評であった。スタージュの内容を盛り込んだホームページを作成する授業もあり、行事や参加者へのインタビューなどが読めるようになっていた。しかしながら故障が多くパソコンの台数が足りないなど、問題も多かったようである。又プログラムには、発音矯正や、身体を使ったオーラルの授業（リズムを手拍子でとりながら音読する等）のように、参加者自身の弱い部分を矯正しながら、教授法も学習できるようなものもあった。又、例えば教育法に関する授業にしても、対話者の心理分析から始めるものや、教材や試験問題を実際に作成するもの、印欧語族とは全く異なる語を学ぶことで、アジアやアフリカなどの学習者における意識の変革を実体験するもの、ひとつの村をシュミュレーションしてゆく中で産業や教育政策、土地開発問題や刑事事件など多様な問題をフランス語で組み立ててゆく方法など、様々なアプローチが可能であることを知った。プログラムを見ているだけで、語学教育の可能性を見る思いであった。そうした中、私の選択した授業は文学系が必修も含めて2科目、文法と文化に関するものがそれぞれ1科目ずつの計4科目である。

必修で受講した「テキストと読解」は最も満足度の高い授業であった。前半と後半で講師が交代したためかなり内容に違いがあったが基本的にはテキストの分析と作文を主眼に据えたものである。短いテキストを取り上

げ、毎回違った分析方法を紹介、そして実際に残りの時間で課題にそった文章を作成する。作文は日本では回避されがちであるが、実際に行ってみると「読み解くため」にも「書く」という作業がいかに有効かがよく分かった。なぜなら実際に作文をしていくと、その過程で必ずもう一度与えられたテキストを分析する必要があるからである。その場合、書きかけのテキストと比較するため、分析内容も一度目のものより具体的で詳細なものとなる。例えば、視点がいくつも混在するテキストの続きを書くという課題が与えられたとする。そうすれば、まず書き始める際に話者と視点をどこに据えるか決めなくてはならない。それから視点を自然に移動させてゆく為に、逐一元のテキストに戻って視点や発話のレベルを細かく分類していくことになる。

テキストの分析の方法にしても、「誰が」「何について」話しているのか、背景やその後の経過を予想させるという非常に初歩的な段階から始まり、発話のレベルの分析、詩の模擬授業など高度なものになっていった。前期の講師は文学関係の論文の他にも高等学校での作文に関する著書もあり、又、自身短編小説なども書いている人物だけに、文学的な予備知識のない者にも文学の楽しさを味わうようにしむけるすべを心得ていたようである。予備知識を前提とせず、参加する者をいつの間にか引き込むという彼の技術は非常に参考になった。第一回目の授業はとりわけ印象深いものだったが、その回では作文でなく、ごく短い文の暗唱が行われた。短時間でテキストを覚えようとする、文と文の流れを把握しなければならない。また、語り手に感情を移入しながら語ろうとすれば、細かい状況（話者の性別、年齢、職業、習慣、性格、その場の情景など）をある程度イメージしなければならないので、作文の時と同様に、小さな手掛かりから想像力を膨らませて情景を補足してゆくことになる。このように、受講者は分析の態度をごく自然に身につけてゆくことが可能となるのである。

以上のように、2時間休憩なしでも全く苦痛にならない素晴らしい授業

であり、実際に自分の文学の授業に取り入れたいと思う面が多くあった。しかし、多様な学生相手の教育者を対象とする授業だけに、日本におけるいわゆる「国語」の授業のような印象を受けることもあった。そうした時、何が一番問題になるのか？ それは「答えの誘導」ではないだろうか。学生に意見を聞きながらも、いつのまにか彼等から自分が前もって用意した答えを引き出そうとしてしまっていることがある。高等学校までの国語には、必ずといっていいほど「こう読まなければならない」という答えがある。もともとは読書の手掛かりでったはずの読解の方法が、高校教育ではしばしば拘束となってしまっているのである。一方、大学での文学の魅力は、まず何よりも「解釈の自由」ではないだろうか。ある程度読解力のある学生を対象とする（あるいはそれが前提となっている）ので、教師すら学生の新たな解釈の可能性に心踊らせることもあるのだ。私自身、自分の文学演習においては、学生にできるだけ自由な解釈を述べてもらうようにしている。ところが実際に学生に意見を言わせようと思うと質問を限定する必要があり、とりわけ文学作品に対するアプローチに慣れない学生を相手にする場合など、答えやすい尋ね方をするうちに、答えを誘導する形に陥ってしまうことも少なくない。「テキストと読解」の講師は最後に、読解とは畳んである紙を開くことであると述べた。紙を開く喜びを学生に教えること、それが必要なのである。しかしレベルが進めば、同じように紙を開くだけでなく、紙の裏や材質を調べたり、違う方向に折り返したりする可能性も出てくる。文学作品へのアプローチの仕方を教えると同時に学生の想像力を限定してしまわないこと——活気ある授業を行うために得た今回の技術を反映させつつも、解釈をパターン化しないようにするバランス感覚を常に忘れないことを、スタージェ終了後、改めて確認したのである。

この授業は文学演習の参考のために受講したのだが、第二外国語の授業にも思わぬ収穫があったので、最後にそのことを付け加えておこう。それ

は自由作文の導入である。実際に体験してみると、文章を完成させ人前で読むことは、思っていたよりもずっと満足感を与えるということが分かった。そして作文を完成できなかった回にも、次は必ず読もうという意欲をかきたてられた。現在日本で担当しているクラスでは、レベル的に難しいとも考えたが、帰国後、グループごとに写真を用いた物語の作成や料理のレシピ作りをさせたところ、皆、非常に熱心に行っていた。最近の学生は受動的であるという批判も多いが、筋道さえたてておけば、むしろ創造的な作業の方が喜んで受け入れられるように思う。

もうひとつの文学の授業は、児童文学を初級、中級の授業に取り入れる講義であった。そこではまず圧倒的な量の資料と創意工夫にまず驚かされた。外国人が学び難いことわざを、同じ目的で作られた子供むけの絵本から学ぶ案、物語の最初の数行と終わりの数行だけをカードにしてペアを探す授業案などが紹介された。ゲーム感覚で楽しみながら、語りの人称や時制、人物や背景の分析もでき、大変楽しい試みであった。上記の授業にしてもこの授業にしても、学生が自然に取り組む形にすることが、あくまで求められていることが分かる。その後、書店で参加者が推薦された書籍を購入している姿も見かけた。自国では教材が手に入らない状況についての相談にも講師は熱心にアドバイスを与えており、スタージュ全体でも最も好評をばくした授業のひとつだったのではないかと思われる。ちなみにスタージュの間はビデオや書籍など資料を集めた図書室もあり、参加者は自由に借り出すことができるようになっていた。

この授業は文学というよりはむしろフランス語講読のための講義であり、本格的な文学作品が扱われることも少なかったのも、そもそも参加者の層が前述の文学の授業より広がったようである。フランス人の子供が絵本や児童文学を読んで正しいフランス語に親しみ、語彙を増やしてゆくように、外国語学習者も本を通して語学を習得するというのは自然な発想で

あろう。しかし、日本で実際に教える際、語学学習用のテキストといえども本格的な文学作品の抜粋が扱われることがある。そうした時、もともと文学専門ではない教員はもとより、文学専門の教員の中にも違和感を覚える者がいるのではないだろうか。文学作品が日常生活で役に立たない特殊なフランス語と感じられる者もいるだろうし、また、単に語学習得の為に文学を取り上げることに抵抗を感じる者もいるであろう。しかしながらありきたりの意見ではあるが、語学の習得は総合的に行うべきものなのではないだろうか。日本では、かつての文学偏重の教育のゆりかえしからか、文学を完全に切り捨てようという傾向も見られる。スタージュにおいても文学関係の授業は少なかったが、それでもまだ多いという声も聞こえてきた。しかし、今回スタージュでも扱われたアポリネールの詩を、帰国後初級の授業で取り上げた時、韻や音節の数、改行による効果などを理解していく中で、学生達は改めてフランス語の味わいを知り、感慨深い様子であった。そうした経験からも、今回の児童文学の講義のように幅広い参加者のいる場を通して、原文のフランス語で文学作品に触れる重要性を、多くの教師が認識してくれることを願わざるを得ない。そしてそうした教師達や、授業がきっかけで原書を手にする学生を見て、文学専門である教員も語学習得のためのフランス文学のありかたを、柔軟かつ真剣に考えるようになることを希望するものである。

次に、文化に関する授業に説明を移すことにしよう。これに関しては、後期に入り「文化的アプローチ」という授業を受講した。テレビのコマーシャルや商品のパッケージを分析したり、参加者が自分の国で使われるジェスチャーや祝祭日、計算の仕方、色・動物のイメージを紹介したりなど、実際に語学を学ぶだけでは理解できない背景を学んだ。参加者が、フランス、中国、カナダ、ルーマニア、フィンランド、カザフスタン、ベネズエラなど様々な国の出身であり、又、講師や他のフランス人にしても、

ドイツ、韓国、トルコ、モロッコなどで働いた経験があるため、実に多くの興味深い話を聞くことができた。講師の話の中で特に興味深かったことは、実際に言葉の上でコミュニケーションがとれるようになって、人間関係を円滑に進める上で必要な背景を知る手立てがなかなか見つからないということであった。近年は辞書も進化しているとはいえ、各国の辞書は仏仏辞典を基礎にしているため、フランス人には当然である文化的コードが欠落しがちである。しかし、一語一対応で翻訳できない間隙にこそ、異文化を感じる喜びがあるとも言える。又、それを教えることが教師の役目であるように思われるのである。

最後に文法の授業についてであるが、時間割りや内容上の問題もあって、選択できたものが初心者むけの文法の授業ではなかったため、実際に授業の参考になる話を聞くことはできなかった。しかしながら、最近の文法の授業の傾向が、体系的なものから実際の使用に即したもの（例えば文法的には例外にあたるため教科書にはこれまで載っていなかったが、日常生活ではしばしば見られる動詞の特殊な時制など）に変化しているということを知ることが出来た。文法教育についても自分が学んだ頃よりも進歩を遂げ、具体性を増してきているということは新鮮な驚きであった。自分の与えられた教育を繰り返すだけではいけない——これは当然ではあったりもなかなか気付かないことだけに、私にとっては1つの収穫であったと考えている。従来の「型」にそった練習から多様な状況に対応した練習への移行は、他の分野にも見られた。例えばガイダンスのみしか聞くことはできなかったが、会話の役割練習を再考する授業でも、より柔軟な可能性への対応を考える教材作りに取り組むことが目指されていた。

4. 実際に学生の立場を経験した利点

昨年5月に東京で行われた事前説明会では、前年度の参加者から意見を

聞くことが出来た。その時自分が学生の立場に身を置くという経験がとても貴重であったと聞かされたが、それは実際にスタージュに参加して一番感じたことでもある。利点のひとつとしては、授業というものがほんのわずかな工夫でいかに学生の意欲を誘発したり、反対に削いでしまったりするかを実感できたことが挙げられる。工夫と言っても授業内容だけを意味するのではなく、話術や時間配分もそこには含まれる。序で述べたように以前は手取り足とり学生の興味を引こうとする授業に抵抗を感じていたのだが、実際に授業を受けていると、確かにそうした教師の工夫がとりわけ長期の授業において重要であることが分かった。また、教師の立場の時にはガイダンスというものをさほど重視していなかったが、それを聞く立場にたつと、どれほど真剣に学生が授業の選択に悩み、ガイダンスを参考に行っているのか気付くことができた。こうしたことは、まさしく実際に学生となって初めて理解できる類いのことではないかと思う。

5. 総 括

ここまで授業にしか触れてこなかったが、生活面においてもスタージュでは様々な活動が提供され、非常に細やかな配慮をもって運営されていた。宿泊施設は学内の寮が確保されていたし、又、家族で参加している参加者の為には学外の住宅の斡旋も行われていた。ほとんどの外国人参加者はフランス政府の援助を受けていた為、食事は食堂で取れるように最初にカードが配られ、上限を超さないように計算しながら自由に選択することができた。また、昼は料理教室、夜はヨガや映画、週末は遠足などのプログラムがほとんど無料で提供されており、経済的な心配をすることなく充実した日々が送れるようになっていた。ただし時間的な制約のため、積極的に町へ出ていくことをしない参加者もいたのではないかと思われる。また、遠足などでは同じ国からの参加者が固まってしまうがちであり、週末のハードな遠出によって平日の疲れを取れないまま体調を崩す参加者も多

く見られた。しかしながら、持ち寄った民芸品・民族衣装の交換会や、参加者企画によるアジアの夕べ、アフリカの夕べ、ラテン・アメリカの夕べ、フランスの夕べなどでは、昼間の授業で知り合った参加者達の別の顔を見ることができ、普段テレビや劇場で見るプロのパフォーマンスとは違った感動を味わうことができた。

今回参加するにあたって目標としてきた「文法」「文学」「第二外国語」に関する授業の改善については、文法以外は取り入れることが可能な資料や授業形態を得ることができた。そしてそれは、参加者と講師、主催者の三者それぞれの真剣な姿勢あつてのことであると思われる。日本人は現在では教師も学生も気軽にフランス旅行をできるような環境にあるが、南米やアフリカなど、政府の援助がなければ渡仏の難しい環境にある参加者達は、このスタージュから少しでも多くの成果を得ようと懸命であり、それゆえ講師に対する要求も大きい。期間が短いだけに、授業に納得できなければ、初回の授業後すぐに、改善を求める訴えを講師と主催者の双方に提出する。そして主催者側からは、前期、後期終了時のアンケートによって、多岐にわたる詳細なチェックが行われていた。そうしたことが、これほど様々な参加者達に対応するプログラムを可能にしているのであろう。フランス語を使用することが日常の生活を左右する国々——そういった国々が表面に見えているよりも遙かに多いということを知り、そうした国々に対応する語学教育の制度を支援してゆくフランス政府の努力と困難を今回かいま見ることができたことは、予想外の収穫であった。こうした経験は、おそらく私以外の日本のフランス語教師にとっても、教育に関する視野の拡大に大いに役立つことであろうと思われる。

注

- 1 ここでは全ての国名を挙げることはできないが、<http://www.ciep/cyberjournal.fr> にアクセスすれば、誰でもスタージュ参加者の構成を知ることができる。

- 2 例外的に多かったアルジェリア (39人) を除くと、二桁の参加者があった国でも20人を超えることはなかった。参考までに、以下にその国々を挙げておく。
日本 (18人), アルゼンチン (15人), チリ (15人), チュニジア (15人), カザフスタン (12人), ルーマニア (11人), ガーナ (10人)。